

LEVEL

4

Web
Tadoku
Books

アリババと にん どろ ぼう 40人の泥棒

～『アラビアン・ナイト』より～





朗読音声のダウンロード
Audio download

★よまえ読む前に Before you read

《多読の読み方》

多読とは、とてもやさしい本から楽しくたくさん読んで日本語を身につけていく方法です。

次の4つのルールを守って楽しく読みましょう。

1. やさしいレベルから読む
2. 辞書を引かないで読む
3. わからないところは、とばして読む
4. 進まなくなったら、他の本を読む



《How to do Tadoku》

Tadoku recommends that everyone should start with very easy books and enjoy a lot of them following the 'Four Golden Rules' below.

1. Start from scratch.
2. Don't use a dictionary.
3. Skip over difficult words, phrases and passages.
4. When the going gets tough, quit the book and pick up another.





昔、ペルシャのある町に二人の兄弟が住んでいました。兄の名前はカシム、弟の名前はアリババでした。父親が早く死んでしまったので、二人はとても貧乏でした。毎日、森へ行って木をとってきて、売って暮らしていました。

でも、兄のカシムは、お金持ちの家の娘と結婚しました。だから、働かないで、毎日遊んで暮らすようになりました。弟のアリババは、貧乏な家の娘と結婚しました。真面目に一生懸命働いて、貧乏でも楽しく暮らしていました。



ある日、アリババは森で木を切っていました。
疲れたので休んでいると、遠くの方から何か音が聞こえてきます。よく聞くと、たくさんの馬が走ってくる音のようです。

—— ずいぶんたくさんの馬だ。何だろう——
怖くなったアリババは、ロバを木の後ろに隠して木に登りました。

アリババが木に登ったとき、たくさんの男たちが馬に乗って走ってきました。男たちはみんな色が黒く、目がきらきら光って怖い顔でした。

—— 泥棒だ！ ——



と、アリババは思いました。

男たちは、アリババの登った木の下まで来ると、馬から下りました。そして、馬の背中から大きな袋を下ろしました。袋はとても重そうです。袋を肩に担いだ男たちは、木のそばの岩の前に立ちました。全部で四十人います。一番前にいる男が親分のようにです。親分が、岩に向かって言いました。

「開け、ゴマ！」

すると、ゴロゴロと音がして、大きな岩が真ん中から割れて、戸のように両側に開きました。

——あ!——

アリババは、とてもびっくりして声を出しそうになりました。

男たちが岩の戸の中へ入っていくと、岩は、また閉まってしまいました。

しばらくすると、またゴロゴロと音がして岩が開きました。男たちが何も入っていない袋を持って出てきました。最後に、親分が岩に向かって言いました。

「閉まれ、ゴマー!」

すると、岩の戸が、またゴロゴロと閉まりました。それから、男たちは、馬でどこかへ行ってしまいました。

アリババは、少し木の上で待ちました。音が聞こえなくなったので、木から下りました。そして、岩の前に立って、さっき男たちが言った言葉を言ってみました。

「開け、ゴマー!」



すると、岩が割れて開きました。アリ
ババはそつと中へ入りました。中に洞穴
が続いています。

「うわっ！ これはすごい！」

アリババはびっくりして大声を出しまし
た。洞穴には大きな袋がたくさん置い
てあって、どの袋にも宝物や金貨が
たくさん入っているのです。アリババは、
その袋を六つとって外に出ました。そ
して、三頭のロバの背中に袋を二つず
つ載せて、

「閉まれ、ゴマー！」

と、大声おおごえで言いいました。岩いわは閉しまりました。アリババは急いそいで家いえに帰かえりました。

アリババの妻つまは、金貨きんかの入はいった袋ふくろを見みて、びっくりして言いいました。

「この金貨きんかは、どうしたのですか？」

アリババは森もりの中なかで見みたことを話はなしました。すると、妻つまは喜よろこんで、袋ふくろの金貨きんかを「一枚いちまい、二枚にまい…」と数かずえ始はじめました。

アリババは言いいました。

「一枚いちまい一枚いちまい数かずえていたら、何日なんにちもかかってしまうよ」

「でも、金貨きんかがどれぐらいあるのか知しっていたほうがいいと思おもいますよ。あ、そ
うだ。カシム兄にいさんのところへ行いって、大おおきいカかップを借かりてきましよう」

妻つまはそう言いうと、兄あにのカシムの家いえに、米こめや麦むぎをはかるカかップを借かりに行いきま
した。兄あにの妻つまはびっくりして、

——アリババの家には、そんな
 なたくさん米や麦はないの
 に、カップで何をはかるんだろ
 う——
 と思いました。そして、底に油
 をぬって、カップを貸しました。
 アリババの妻は、急いでカッ
 プを持って帰って、金貨を数
 えました。それからまた急いで
 カップを返しに行きましたが、
 底に金貨が一枚くっついてい
 たことに気がつきませんでした。





カシムの妻は、底についた金貨を見て驚きました。

——金貨！ アリババの家には金貨がたくさんあるんだ。だからカップではかったんだ——
カシムも、この話を聞いて、とても驚きました。そして、すぐにアリババの家へ出かけて行って言いました。

「おまえは、貧乏だと思っていたのに、いつ金持ちになったんだ？ おまえが金貨をたくさん持っているのはわかってるんだぞ」

アリババは、カシムには金貨のことを言わな

いつもりでしたが、わかってしまったのでもう仕方がないと思

泥棒どろぼうにあったことなど全部話ぜんぶはなしてしまいました。「開け、ゴマ」「閉まれ、ゴマ」という言葉も教ことばおしえてしまいました。

カシムは、すぐに十二頭じゅうにとうのロバを連れて、森へ行きました。岩いわの前まえに来ると、ロバをそばの木きにつないで置いて、

「開け、ゴマ」

と言いいました。

すぐに岩いわが割われて開ひらきました。洞穴ほらあなに入はいると、たくさんきんかの金貨たからものや宝物があつたので、カシムは大喜おおよろこびです。大きい袋おおいふくろを二十四個にじゅうよんこも持もって岩いわの前まえまで持もっていきました。そして、元氣げんきよく、

「開け、米こめ！」

と言いいました。岩いわは閉しまったままです。

——あれ？おかしいな——

カシムは次に、

「ひら開け、まめ豆！」

と言いっていみました。でも岩いわは開ひらきません。

——え、どうしよう！——

「ひら開け、むぎ麦」「ひら開け、あわ粟」など色いろ々いろ言いっ

ていましたが、やっぱりだめでした。どう

しても「おゴマ」が思おもい出だせませんでした。

そこへ泥どろ棒ぼうたちが馬うまにの乗のって帰かえってき

ました。親おや分ぶんが、

「ひら開け、ゴマ」

というと、すぐにゴゴゴゴと洞ほら穴あなの岩いわが開ひらきました。すると、そこにカシムが立た



っていました。足元には、金貨の入った袋
がたくさんあります。泥棒たちは、たいへん怒
って、カシムを斬り殺してしまいました。

カシムの妻は、夜になってもカシムが帰っ
てこないのでも心配になって、アリババ
に、「カシムを探してほしい」と言いました。

アリババは次の日の朝早く、ロバを連れて
森へ行きました。あの岩のところへ来ると、

「開け、ゴマ」

と言いました。そして、岩の中を見て、びっくりして倒れそうになりました。兄
のカシムが死んでいたからです。顔中、傷だらけです。アリババは泣きながら、



カシムの体からだをロバに載のせて、カシムの家いえへ行いきました。

カシムの家いえの戸とを叩たたくと、女中じょちゆうのモルジアナがで出てきました。一番頭いちばんあたまが
いい女中じょちゆうです。アリババは、モルジアナにちい小さな声こえで言いいました。

「よく聞ききなさい。おまえのご主人しゅじんさまは、泥棒どろぼうに殺ころされてしまつたんだよ。
でも、このことはだれも知しらない。立派りっぱな葬式そうしきを出だしてやりたいが、顔かおの傷きずを他ほか
の人ひとに見みられたら困こまる。どうしたらいいか考かんがえてくれ」

モルジアナは、近所きんじよの人ひとたちに、カシムが急きゆうに病びよう気で死しんだと話はなしてから遠とお
くの町まちの靴屋くつやに行いきました。そして、靴屋くつやのおじいさんに、

「針はりと糸いとを持もって一いっ緒しょに來きてください。お金かねをたくさんあげますから」
と言いいました。そして、

「これは、だれにも知しられたくない仕事しごとなので、悪わるいけれど目隠めかくしをしますよ」
と言いって、おじいさんに目隠めかくしをして、手てを引ひいて家いえまで連つれて歸かえりました。



モルジアナは家まで来ると、靴屋のおじいさんに、

「ご主人の顔の傷をきれいに縫い合わせてください」

と言いました。

靴屋はカシムの傷をとても上手に縫い合わせました。モルジアナは、おじいさんに金貨をたくさんあげて、また目隠しをして、おじいさんの店まで連れて行きました。

アリババは、立派なお葬式を出すことができず、だれもカシムが泥棒に殺されたとは思いませんでした。

それから、アリババと妻はカシムの家に引っ越して、みんなで暮らすことになりました。

その後、泥棒たちはどうしたでしょうか。

あの森の洞穴に帰ってきた泥棒たちは、カシムの体がなくなっているのがつきましました。怒った親分が言いました。

「この場所を知っている者が他にもいるんだな。すぐにそいつを見つけなければ！」

泥棒の一人が言いました。

「私が町へ行って調べてきます」

その泥棒は、朝早く町へ行きました。外はまだ暗くて店はどこも閉まっていたんですが、一軒だけ開いている店がありました。あの靴屋です。靴屋では、

あのおじいさんが靴を作っています。

泥棒は店に入って言いました。

「おはよう、おじいさん。朝早くからよく働きますね。でも、暗いからよく見えないでしょう?」

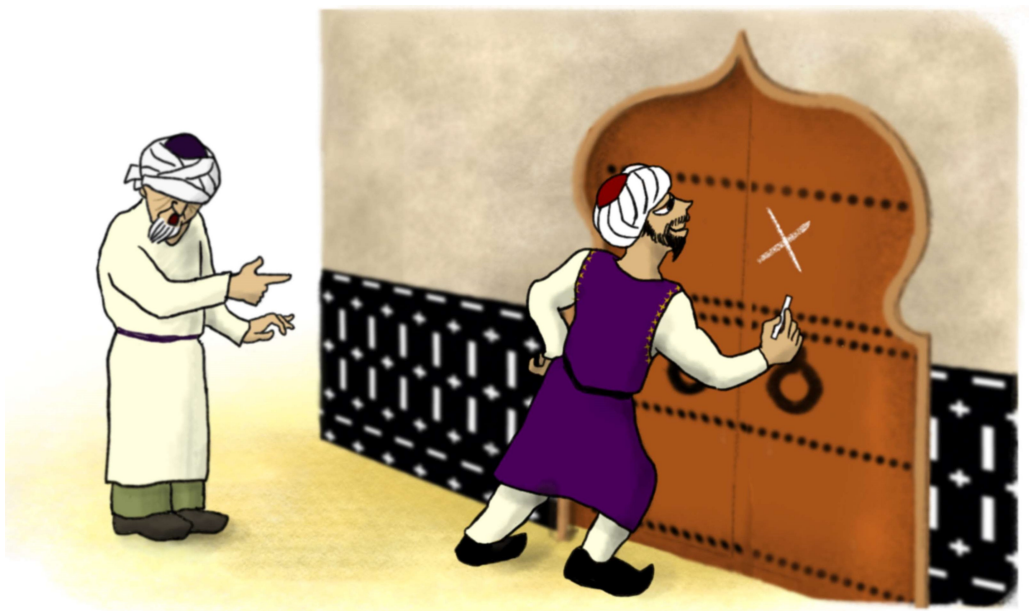
すると、おじいさんは言いました。

「いいえ、よく見えますよ。私の目は、まだまだ若い者にも負けません。昨日も、殺された男の顔の傷を縫い合わせたんです。どこを縫ったのかわからないくらい上手に縫ったんですよ」

「えっ、それは本当ですか? それはどこのだれなんです?」

「それが、私にもわからないんですよ。目隠しをされて、その家に連れて行かれたんでね」

泥棒は、ちよっと考えてから、金貨をおじいさんの手に載せて言いました。



「それでは、あなたにもう一度目隠しを
ましよう。私わたしが手てを引ひいて歩あるきますから、
その家の前まえだと思おもったら教おしえてください」
靴屋くつやは、目隠めかくしをされて、手てを引ひかれて歩ある
きました。そして、カシムの家の前まえで止と
って言いいました。
「ここだっと思おもいます」
泥棒どろぼうは、チョークでカシムの家の戸とに白
い「X」ばつをつけて、大喜およろこびで森もりに帰かえって
いきました。

しばらくすると、買かい物ものに行いっていったモル
ジアナが帰かえってきました。戸とにXばつが書かいて



あります。

——これは何^{なに}? だれが書^かいたんでしよ
う? このままにしていたら、きっとご主^{しゅ}
人様^{じんさま}によくないことが起き^おるわ——

そう考^{かんが}えたモルジアナは、近所^{きんじょ}の家の
戸^と全部^{ぜんぶ}に×を書^かきました。

その夜^{よる}、泥棒^{どろぼう}たちは、戸^とに×が書^かいて
ある家^{いえ}を探^{さが}してやってきました。しかし、町^{まち}
まで来^くると、どの家^{いえ}にも×が書^かいてありま
す。どの家^{いえ}に行^いったらいいのかわからなく
なって、仕方^{しかた}なく泥棒^{どろぼう}たちは森^{もり}へ帰^{かえ}りま
した。

怒った親分は、カシムの家に×をつけた泥棒を殺してしまいました。そして、今度は自分で町へ行きました。靴屋のおじいさんにカシムの家まで案内してもらいました。親分は、戸に何も書かないで、カシムの家をよく見て覚えませんでした。それから森へ帰って、ロバ二十頭と瓶を三十個用意しました。一つの瓶に油をたくさん入れて、三十八個の瓶には、三十八人の泥棒が一人ずつ入りました。親分は、瓶を載せたロバを引いて、その日の夕方、また町へ行きました。

カシムの家の前まで来ると、家の前にアリババがいました。泥棒の親分は言いました。

「こんばんは。私は遠くから来た油売りです。この町は初めて来たので、どこに泊まったらよいかわかりません。今晚だけ泊めていただけませんか？」
親切なアリババは、

「どうぞどうぞ。さあ、入ってください。瓶は庭に置いてください」

と言いました。

親分は、ロバの背中から瓶を下ろして、庭に置きました。そして、中にいる泥棒たち一人一人に言いました。

「おれが、夜、庭へ小石を投げたら、瓶から出て来るんだぞ」

台所では、モルジアナが忙しく夕食の準備をしていました。ところが、そのとき、ランプが消えてしまいました。油がなくなつたのです。そこで、モルジアナは中庭





へ出てきて、油を少しだけもらおうと思っ
て、瓶のそばまで行きました。すると、中か
ら声がします。

「もう、出てもいいのですか」

モルジアナはびっくりしましたが、すぐに低
い声で、

「まだまだ」

と言いました。そして、一つ一つの瓶のそば
に行つて同じように、

「まだまだ」

と言いました。最後の瓶だけには、本当に油
が入っていました。

—— 油あぶら売りというのうそは、嘘ね。この人ひとたちは、きつと、ご主人様しゅじんさまを殺ころしに来きた泥棒どろぼうだわ ——

モルジアナは、最後さいごの瓶かめから油あぶらを取り出だして鍋なべに入れて火ひの上うえにかけました。そして熱あつい油あぶらを泥棒どろぼうたちのいる瓶かめの中なかに入れて歩あるきました。泥棒どろぼうたちは、みんな死しんでしまいました。

夜よる、みんなが寝ねると、泥棒どろぼうの親分おやぶんが庭にわに出てきて小石こいしを投なげました。でも、だれも瓶かめから出でてきません。瓶かめの中なかを見みると、泥棒どろぼうたちはみんな死しんでいます。驚おどろいた親分おやぶんは、そのまま走はしって森もりへ逃にげていきました。

次つぎの日の朝あさ、モルジアナは、アリババを庭にわへ連つれて行いって瓶かめの中なかを見みせました。アリババはびっくりしましたが、モルジアナの説明せつめいを聞きいて、大變喜たいへんよろこびました。

その後、泥棒の親分は、森の洞穴の中で一人で寂しく暮らしていました。しかし、アリババに仕返ししたい気持ち、前より強くなりました。しばらくすると、いい考えが浮かびました。親分は、立派な商人の服を着て町へ行き、アリババの家の隣りに店を出しました。そして、アリババにとても親切にしました。

ある日、アリババは、家にその商人を招待しました。商人が、アリババの家に来ました。

モルジアナは、商人に料理を運びながら、顔をよく見ました。

—— あつ、この人は泥棒の親分だわ！ ——
立派な服を着ていますが、しばらく前に、油売りになって来た泥棒の親分の間違いありません。それに、よく見ると袖の中にナイフを隠しています。

モルジアナは、自分の部屋に行つて、踊りのためのきれいな服に着替えました。



そして、夕食が終わった頃、剣を持って、みんなの前に出て踊り始めました。とても上手に踊るので、みんな大喜びです。だれも、モルジアナの持っている剣が本当の剣だとは思いません。

モルジアナが踊りながら商人の前に来たとき、商人はにこにこ笑いながら財布から金貨を出して、モルジアナの方に投げました。そのときです。モルジアナは手に持っていた剣を商人の胸に突き刺しました。

「モルジアナ、お客様に何をするんだ！」
アリババは、立ち上がって大声を出しました。

しかし、モルジアナは、

「ご主人様、わたしは、ご主人様を助けたのですよ。これを見てください」

と静かに言って、商人の袖の中のナイフを取り出しました。そして、この商人が本当は泥棒たちの親分だということを説明しました。

アリババはそれを聞くと、泣きながら言いました。

「モルジアナ、ありがとう。本当にありがとう」

それからしばらくして、アリババは、またあの森に行ってみました。森の洞穴は前のままでした。宝物や金貨がまだ山のようにはありました。アリババは国で一番の金持ちになり、家族と一緒にいつまでも幸せに暮らしました。

にん どろぼう
アリババと40人の泥棒

～『アラビアン・ナイト』より～

発行年月日：2023年6月30日

かんやく あわのまきこ
簡約：栗野真紀子

さしえ いけだ
挿絵：池田あきつ

かんしゅう たげんごたどく
監修：NPO多言語多読

※菊池寛『アラビヤナイト 三、アリ・ババと四十人のどろぼう』（青空文庫）を基に簡約しました。



NPO多言語多読

tadoku.org



この作品はクリエイティブ・コモンズ表示-非営利-改変禁止4.0国際ライセンスの下に提供されています。

This book is licensed under CC BY-NC-ND 4.0

<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>